



Title	<研究ノート> 日英語の類別表現の意味論試論
Author(s)	早瀬, 尚子
Citation	大阪大学英米研究. 2009, 33, p. 79-95
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99331
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

研究ノート：日英語の類別表現の意味論試論

早瀬尚子

1. はじめに

日本語は英語と異なり、文法カテゴリーとしての数を明示的に持たない言語である。日本語では「机の上に本が（たくさん／山ほど）ある」などの表現からわかるように、本が複数存在していても名詞「本」はそのままの形で用いることができる。ただ、具体的に本の数を指定して明示化したい場合には、三という数詞に加えて「冊」という表現を用いて「机の上に 1本が三冊・三冊の本が ある」と言う。このような「冊」にあたる文法カテゴリーを、類別詞あるいは助数詞と呼んでいる。

類別詞とは、「ものを分類して数える際に文法上用いられる要素」と定義できる。日本語のようにもっぱら数を表す表現を伴うものは数詞類別詞 (numeral classifier) もしくは助数詞とも呼ばれ、ものを数量で表すときの単位を与える役目をもつ。日本語では水や塩などの形を持たないもののみならず、人、動物などそれ自体が存在論的に見て個別化されている存在に対しても適用される。

- (1) 1杯の水 棒1本 料理3品 スパゲッティ2皿 人一人、4匹の
ライオン 鳥が7羽

ここで「杯」「個」「皿」「品」「羽」「匹」「人」など、数量を数える際に出現

するのが類別詞である。

世界中の言語が日本語と同じような類別詞をもつわけではない。言語はこの類別詞・助数詞を文法的にもつものと持たないものとに分類される。そして、類別詞の文法的区別を必須とする言語は「類別詞言語 (classifier language)」と呼ばれている。日本語は類別詞言語であり、日本語における類別詞の言語学的研究としては松本 (1991), Matsumoto (1993) および飯田 (2003) が詳しい。英語は類別詞言語ではないため、日本語の類別詞にそのまま対応する文法カテゴリーは存在しないのだが、それに類すると思われる類別表現は存在する。例えば以下のような量を表す表現は分量語彙ともよばれる。

- (2) a. 不可算名詞 : a glass of water, a pound of sugar, a slice of bread, a head of cattle など
b. 可算名詞 : a pile of books, a group of children, a line of cars, a gaggle of geeseなど (井上 2003: 271)

このような(2)のタイプの表現に着目して研究を行っているのが山口 (2003) である。本論では山口 (2005) に基づいて日英の類別表現の比較を行い、日英の違いがTalmyの類型論的違いに求められる可能性を示唆する。

2. 日英語の類別表現

先に述べたように、日本語は類別詞言語の一例である。対象を数えるときに類別詞を必要とする言語は、世の中に存在する事物を数える単位が、アブリオリに存在するとはみなさない言語である。例えば英語は類別詞言語ではないとされているが、英語には可算名詞不可算名詞が存在し、これは数えられるもの、これは数えられないものとして、予め言語によって分類が成されている。しかしながら、日本語では可算不可算を逐一文法的に明示化する必

然性がない。日本語はいわば、具象物、抽象物すべてのものを、英語の「不可算名詞」、つまりタイプのレベルに属するものとして扱っている。つまり、もの自身に個別性があるとは文法的には認識せず、数量化される単位を持たないがごとくの扱いをし、数量化する必要がある文脈でのみ、その都度数量単位を明示するのである。

日本語のような、「本」「枚」など限定されて閉じられた文法要素を必ず用いなければならない言語とは違い、英語には類別詞と呼ばれる文法上の独立したカテゴリーは存在しない。ただ、類別表現ともいるべきグループは確実に存在する。それは、以下のような例に示される。

(3) a bunch of bananas (バナナ一房)

a herd of cattle (家畜の群)

a head of lettuce (レタスひとつ)

日本語の類別表現では「匹」「個」「本」などに表されるように、表現の可能性が文法的にも固定化されているのに対し、英語の類別表現は、a ~ ofという表現形式をとっている限りにおいて、(完全に自由で創造的というわけではないが)かなり多様な変異形が可能である。上記の他にも、mess, pile, heap, loaf, sprig, head, stack, group, array, pinch, tad, bit, barrel, crate, jar, tub, vat, keg, box, ton, pound, yard, foot, flock, heard, pride, school, bevy, gallon, pint, liter, cup, spoonful, pocketful, mouthful, closetful, truckload, shiploadなどの名詞からこの表現をつくることが可能である。これらを日本語の類別詞と比較しながら検討してみることにする。

日英語の類別表現に共通する事柄として、拡張使用が可能であるということが挙げられる。例えば日本語の場合、類別詞「本」を使うものには次のような例が見られる。

(4) 1本の傘 ボールペン2本 テープ3本 論文5本 ホームラン10

本 映画 3本

一見広範囲にわたる適用例であり、互いの関係づけが難しく感じるかもしれないが、共通点を見いだすことは十分に可能である。この場合はいずれも細く長いものが伸びていくというイメージを伴うものである（松本（1991）、Lakoff（1987））。傘やボールペンは棒状で細長い。テープは巻かれているものを伸ばせば細く長い。論文や映画は読み進むことでその長さや短さを感じることのできるもので、細くはないかもしれないが、一続きの長さを経験することのできるものである。またホームランボールの軌跡をイメージすると、それは確かに細く長いと言えるだろう。このようなイメージにあわないものには「本」は拡張使用されにくいのである。

英語でも同じことが言える。英語でもある1つの類別表現が様々なものに適用される事例が見られるが、そこには拡張の際の法則とでもいうものを見いだすことが可能であり、決して無秩序なものではない。山口（2005）の研究からいくつか例を見てみよう。

(5) a bunch of (束になったもの)

- a. a bunch of bananas
- b. a bunch of grapes
- c. a bunch of flowers
- d. a bunch of children/idiots
- e. a bunch of questions

（山口2005）

このような拡張パターンには、ある規則性が見られる。それは、どんなものにでも適用できるわけではなく、いわゆる典型的な事例における共通性を投影できる場合に容認性が高くなるのである。(5) の場合は**bunch**という表現からも伺えるように、何らかの点で「束」になっているもの、という共通性がみられる。それも、バナナやブドウのように、最初から房状（束）になっ

ているものから、花のように一本一本のバラバラなものを束ねた状態に着目しているものへ、更に質問（抽象物）、人間へと、知覚する人間の意識の中で対象を束ねているものまで、いずれも「束ねる」という機能面での共通性を通じて対象が拡張していることがわかる。

もう一つ類似の例として、英語の類別表現a herd ofについて考えてみよう。この類別表現が自然に使われるのは、(6) のように、家畜など比較的大きな動物の群に適用される場合である。

(6) a herd of cattle/sheep/goats/elephants/deer/cows

この表現は例えば次のように、ステーションワゴンという家畜以外のものにも適用可能である。ステーションワゴンは動物ではないが、移動しうるし、比較的大きな車であるため、その大群について適用することができる（山口(2005)）。

(7) With the end of the ballgame, we disperse in pairs toward the herd of station wagons corralled in the gravel parking lot. (山口2005)

しかし、(8) のように、動きがないものにはa herd ofを適用することはできない。ここで＜可動性＞は一つの重要な要因となっていることがわかる。また(8c)のように小さいものであれば、その容認度が下がることになる。

(8) a. ??A herd of statues (were exhibited at the City Museum)
b. ??a herd of cottages
c. ??a herd of mice

このように、＜可動性＞および＜対象物の大きさ＞という共通性の認識が、類別表現の拡張を動機づけており、それに合致しない対象には適用されない

ことがわかる。

さらなる類例として *a gaggle of* を取り上げよう。*gaggle* は中英語期の動詞 *gagelen*（動詞）と関連する名詞 *gagel*（名詞）からくる表現で、もとは擬声語であった。つまりガアガアとうるさい様子を表すため、典型的にはガチョウに用いられるが、それ以外の「やかましい」集団にも転用されていくことになる（例はBNCコーパスより採取）。

(9) *A gaggle of*（中英語、もとは擬声語）

- a. *A gaggle of* geese
- b. I stood amid *a gaggle of* laughing students in frozen silence, and read the list over and over again.
- c. Then I saw *a gaggle of* youths arriving with guitar cases for a recording session,
- d. At the Irving Plaza, *a gaggle of* girls are wandering around conducting a poll.
- e. Now it had been joined by several cars and a coach was disgorging *a gaggle of* tourists.
- f. On a boat journey to meet Rose, he encounters *a gaggle of* children who are not all one family but the children, step-children and adopted children of an acquaintance (Geraldine Chaplin).
- g. BBC engineers are divided between hacking a Scandinavian proposal to standardise across Europe on eight-channel sound in *a gaggle of* different languages.

ここまででは類別詞を固定して、どのような名詞がその後に用いられているかを見てきたが、今度は逆に、おなじものに対して異なる類別詞が使われる選択的事例を見てみよう。

- (10) a. a group of geese (集団としてもっともニュートラル)
b. a flock of geese
c. a drove of geese (came across the field). (ガチョウの群はぞろぞろと草原の向こうからやってきた)
d. a waddle of geese (went into the pond.) (ガチョウの群はひょこひょこと歩いて池に入っていった)
e. a gaggle of geese

(山口 2005)

(10a) は、集団としてガチョウを捉えるのに通常最も中立的に用いられる表現といえよう。ただの集団ではなく「鳥の集団」ということにもう少し特化すれば、(10b) のようになる。興味深いのは (10c) – (10e) であろう。これらはぞろぞろ移動していく状態 (10c)、よたよた歩く様子 (10d)、そしてガアガアとうるさく鳴く様子 (10e) など、そのガチョウ集団の特性のどの部分に焦点を当てるかによって、選択する類別詞に違いが出てきていることがわかる（山口2005）。

このような類別詞の選択の自由は、英語だけではなく日本語でも見られる現象である。

- (11) a. 我が家には男の子ギャングが二匹おります。
b. うちのワンちゃんは一人で留守番ができないの。

「匹」は人間ではなく動物に使う類別詞だし、逆に「人」は人間に使うのであって動物には使わないはずであるが、実際の会話ではこのようなことはよく起りうる。(11a) では自分の子どもをきかん坊と揶揄しての表現であり、(11b) では犬を家族の一員として、人間と同様に扱っている家庭であることを示唆する表現である。このように、日本語においても、本来的な、あるいは中立的な類別詞を使わず、別の類別詞を使うことはあり得る。

しかし、日本語と英語との決定的な違いは、日本語では類別詞として他の

カテゴリーにおいて確立しているものを転用する例しかないのに対し、英語では他の類別詞表現を借用するというよりも、臨時的に新しい類別詞表現を作り出して用いる例がかなり見受けられることである。つまり、類別詞表現に関しては英語の方が日本語に比べ、自由な拡張を見せているのである。

3. 類別表現の段階性

英語における類別表現は典型的にa+[名詞]+of～形式で表される。しかし、この形式をとるすべての表現が等しく同じ類別表現としての構造を共有しているわけではない。このことは次の例をみても確認できる。

- (12) a. The number of people applying has increased this year.
b. A number of problems have arisen.

動詞の単複の扱いを見ると、同じ名詞句でもどの要素をその「主要部(head)」、つまり名詞句の中核を表すものとして捉えているかが明らかになる。(62a)ではthe numberを、(62b)ではproblemsを、その中心と捉えている。この違いは次のように示すことができよう。

- (13) a. [_{DEF} the [_Nnumber [_Pof people]]]
b. [_{DEF} a number of [_Nproblems]]

ここで興味深いのは、the/a number ofという同一の連鎖が、異なる文法的構造をしていることである。(13a)では主要部numberにof句が連なる、いわば通常の [a/the NP of NP] (cf. a student of Osaka University of Foreign Studies)の構造である一方、(13b)ではa number ofがproblemsに先行する、冠詞などに相当する位置を文法上占めていることになる。この後者の事例はa number ofが類別表現として機能している例であると考えることができる。

このa+ [名詞] +of ~表現のもつ類別性は共時的に見ても固定化した解釈とは必ずしもみなせない。

- (14) a. A bottle of wine spilled.
b. A bottle of wine broke.

同じa bottle of ~表現であっても、それが類別詞として機能している (14a)と通常のofを用いた名詞句として機能している (14b) とがあり、この違いは今度は動詞の意味によって決定される。このように、同一表現の解釈が同じ時代においても交替し、その構造解釈が曖昧 (ambiguous) である現象が生じている。

英語の類別表現が、日本語より自由な拡張を見せていると先程述べたが、そのことは、英語の類別表現というカテゴリーの流動性を同時に示していることになる。具体的には、個々の表現によって、「類別表現」として文法化されている度合いが高いものと、まだそこまでに至っていないと判断されるものとが混在している、ということになる。

例として、a {pride/gaggle/parade} of ~という三種類の類別表現の具体的事例を、BNCコーパスを用いて調べてみた。

a pride of… は、生起例自体も少なく、またlion/lionessとのみ連語を成す、固定化した連語表現であることが窺える。一方、a gaggle ofやa pride ofは共起する名詞の種類が多岐にわたり、生産的な拡張が盛んな表現であることが窺える。

a gaggle ofとa parade ofとの大きな違いの一つは、後者の方が適用範囲が高く、それに従って意味の抽象化も促進されていることである。いずれのタイプ数も36-38とほぼ同じであるが、a gaggle ofはそのうちの大部分が人間を表す名詞、つまり現実にgaggleに相当する音を出すことができる名詞に先行しているのに対し、a parade ofは無生物など本来ならばパレード・行進を行わないはずのものをも従えている。(15) はa gaggle ofの、(16) はa parade ofの、

	A pride of…	A gaggle of…	A parade of…
BNC での生起数	6	38	36
共起する語のタイプ頻度	<2 タイプ> lions(5), lionesses(1)	<33 タイプ> 人間…[30] Children(3) , youths(2) students, ads,members, onlookers,fogies, hooligans, friends ladies/women tourists, attendants, novices, bikers(…) 動物…[2] pigs, geese 植物…[1] begonias	<33 タイプ> 人間…[23] People, priests, champions… 動物…[1] elephants 植物…[1] 40 ft trees 無生物…[8] shops(4), old-fashioned manners, cars, Well-dressed bears, facts, topics, relations, dreams(…)
単複の扱いが明示されている例		単数扱い 0 例 複数扱い 5 例	単数扱い 1 例 複数扱い 0 例

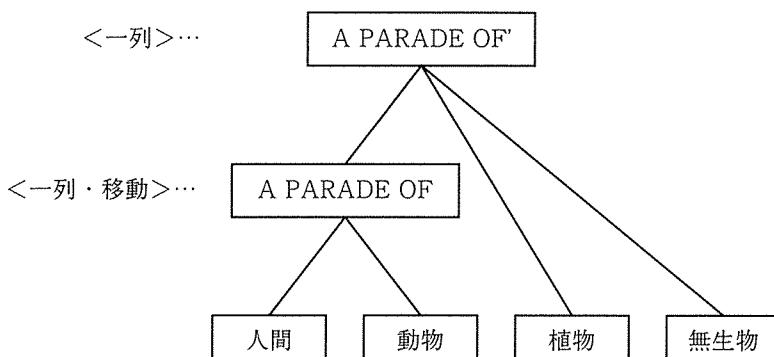
無生物名詞に先行している実例である。

- (15) Begonias are particular favourites and *a gaggle of them* gather on the paved area near the front door resplendent in pink, scarlet and yellow.
- (16) a. In the beargardens that became a feature of almost every major kite

flying meeting, a *parade of well-dressed bears* took on the role of chairbears, observing in silence the antics of crazy "humes" (…)

- b. So it was a shock this morning, after miles of deserted sands , to come into a small crowded bay: to see buckets and spades and sandcastles, a *parade of shops* with fishing nets and beach balls and to return to a world of people.
- c. He used rather old - fashioned diction and made a *parade of old-fashioned manners*.
- d. It might therefore be imagined that a *parade of relevant facts* would by itself solve any argument.

一般に、ある表現と共に起する表現の種類が多ければ多いほど、タイプ頻度が高いと言われる。タイプ頻度が高ければ、その表現の適用範囲が広いということになり、表現の意味の抽象度も上がり、生産性が高くなる、とされている（詳しい説明については早瀬・堀田2005などを参照のこと）。ここではa parade of表現が（16）のように無生物名詞に適用されていることから、その意味の抽象度が高まっており、具体的なパレードという「行為」から、一列



a *parade of* の表現射程ネットワーク

に並んでいるという「状態」へと、意味を変化させていることが見て取れよう。

もう一つの違いは、*a gaggle of*と*a parade of*という表現を冠した名詞表現の単複の扱いである。前者では複数と見なされる事例が5例見つかるのに対し、単数扱いの例は見つからない。一方後者では、数が少ないものの、単数として扱われている例が1例のみで、複数扱いの例は見つからない。このことは、<*a gaggle of+名詞*>という表現における主要部が、この表現に続く名詞の側にあることを示しており、以下の(17)に表示するような再分析が進んでいて、*a gaggle of*が名詞に付加される類別表現(CL:Classifier)として定着しているか定着しつつあることを示唆する。

- (17) [a gaggle [of geese] _{pp}] NP → [[a gaggle of] _{cl} [geese] _N] NP

 - a. A gaggle of girls are wondering around conducting a poll.
 - b. A gaggle of geese not only act as a deterrent to a prowler, ...
 - c. A gaggle of them (=begonias) g a t h e r on the paved area ...

一方の *a parade of* は、単数で受ける事例しか見つけられなかった。数少ないデータから即断はできないものの、傾向としては、依然として *a parade* の方が主要部とみなされており、従来的な A of B 表現として認識されていて、*a parade of* で類別詞とする再分析・文法化はそれほど進んでいないという可能性が考えられる¹⁾。

このように、同じ類別表現とされる形式をとっても、その意味の抽象化、類別表現としての確立の度合いについてはそれぞれの具体的表現の間で異なりがみられる。英語の類別表現は、中心的な表現および周辺的な表現からなる、プロトタイプカテゴリーを形成していると言えよう。

4. 日英語の類別表現の類型論的考察

これまで、英語の方が日本語よりも流動的でかつ拡張性の高い類別表現を

もっていることを見てきた。ではなぜ英語には日本語と異なり、拡張が比較的自由な類別表現が可能なのだろうか。

一つには、a～ofに挟まれる名詞には、普通名詞の他に動詞派生名詞、動名詞など、動詞に関連するものが意外に多いという事実が挙げられる。これは英語の特徴でもあるのだが、英語はゼロ派生名詞といって、動詞から名詞を形態的に変えることなく作り出すことが比較的自由に可能である。したがって、同型により名詞と動詞両方を表す、(18b) の表現も可能である。

- (18) a. 名詞と動詞が同型であるものの例 : drain, drill, duel, export, farm, fan, mop, pin, study, walk, work ….
- b. He bought a new *mop*, and he mopped the floor.

このことは、動詞関連の名詞がこの類別表現に自由に生起できる可能性を開かせるものであり、表現の幅を広げることになる。というのも、類別対象物の形状などといった固定的、恒常的なものに限定されず、その対象物がどのような行動をとるのか、どのようなあり方、存在の仕方をしているのかといった、行為の（一時的な）様態にまで言及できるようになるからである。

また、もう一つの理由として、英語と日本語との類型論的な違いが関係してくると考えられる。英語の動詞には様態情報を豊富に含む語彙が多いことで知られている。例えば以下の日本語と対応する英語とを比較してみるとよくわかるが、日本語の場合、動詞は常に同じ「歩く」であるのに対し、英語の場合は動詞そのものが異なる。英語の表現を日本語に訳そうすると、その様態を動詞とは別の表現で明示化しなければならなくなるのである。

- (19) ramble (ぶらぶら歩く), shuffle (足を引きずって歩く), stride (太股で歩く), waddle (よたよた歩く), swagger (威張って歩く)

Talmy (2000) によれば、英語の動詞の持つこの特徴は、類型論的な意義

を持つという。Talmyは言語に大きく二つのパターンがあると主張しており、その一つは動詞枠づけ言語（Verb-framed language）、もう一つは付隨要素枠づけ言語（satellite-framed language）である。日本語は前者に、英語は後者に分類される。付隨要素枠づけ言語の場合、動詞は様態情報を含むが、動詞枠づけ言語の場合には様態情報は動詞の中に含まれず、別の独立した要素で表されるとされている。

<図：言語パターンの二つのタイプ>

付隨要素枠づけ言語（Satellite-framed language）：英語

移動 + 様態	経路	起点 / 到達点
↓	↓	↓
VERB _{FINITE}	SATELLITE	N (+ 前置詞)
↓	↓	↓
run	out	of the house

動詞枠づけ言語（Verb-framed language）：日本語

移動 + 経路	起点 / 到達点	様態
↓	↓	↓
動詞 _{定型}	N (+ 後置詞)	動詞 _{非定形}
↓	↓	↓
入る	部屋へ	走って
'enter'	'(into) the room'	'running'

この分類が正しければ、英語の類別表現がこれほどまでに創造的かつ広範囲な使用が可能であり、様々な情報を担えることの説明が可能となる。つまり、1) 英語の類別表現は<a+名詞+of ~>という形式をとる複合的な表現であり、かつこれは名詞部分に動詞派生の名詞をとることも十分に可能な形式である。また、2) 英語は動詞をそのまま名詞として用いるゼロ派生名詞が豊富に存在するため、動詞によって表される事態に関わる情報を取り入れることが十分に可能である。特に、3) Talmyの言語類型によれば、英語の動詞に

は様態情報が含まれるため、名詞化されたとしてもその様態情報をそのまま保持することが可能な構造となっている。

- (20) a. a skulk of fox (skulk: v. こそそ歩く n. キツネの群 (古い表現))
b. a parade of penguins (parade: v. 行進する、整然と並んで歩く、みせびらかす)
c. a pride of lions/peacock (pride: v. 誇る、自慢とする)
d. a sloth (sloth: a. ものぐさ n. クマの群)

キツネやライオン、ペンギンなどに典型的に使われる類別表現には、skulk (こそそ歩く)、parade (整然と並んで歩く、行進する)、pride (誇る、自慢とする)などの動詞に対応する名詞が用いられている。また、slothは形容詞slow (のろまな、遅い) からの派生形であり、やはり様態を含んだものと考えられる。このように、対象の動的な側面に着目した表現は、日本語の類別詞には見られないものである。

以上見たような英語の類型論的特徴から、その類別表現の生産性の高さと意味範囲の広さが説明できると思われる。英語の類別表現は、量を語りながらも、その対象物がどのような状態で存在しているのかというその場の動的な様態をも同時に伝達することができる、情報量豊かな表現なのである。

5. まとめ

この小論では、英語の類別詞相当表現の文法的位置づけについて、意味の観点、文法的観点、および類型論的観点から考察を行った。英語の類別表現は文法的位置づけも表現によって様々であり、類別詞表現としてdeterminer的にふるまうものもあれば、元の名詞としての地位を失っていないものまで段階的であった。また、元の名詞の意味に由来するメタファー的な拡張により、広範囲の対象名詞に適用することができることも明らかになった。この

ことからわかるのは、英語の類別表現が日本語の相当例と比較しても明らかに自由度が高い、ということである。本論ではこの理由をTalmy (2000) による類型論的二分法と関係づけるという可能性を示唆した。具体的な結論を出すには更に網羅的な調査が必要となるが、本論での議論はその方向性を試論として提示したことになる。

注

- 1) Brems (2003) は、a pile/piles of ~、a heap/heaps of ~、loads of ~、lots of ~の類別表現をコーパスで検索し、その主要部の取り方によって類別表現としての文法化的度合いを測ろうとし、その結果を一直線上に並べて表示している。しかし、ここで見たように、動詞の単複などからわかる主要部の選択だけではなく、その他の要因（ここでとりあげた抽象度の違いという要因はそのうちの一つ）もあわせて考えると、ことはそれほど単純に1次元的に表示できるものではない可能性が高い。

参考文献

- Brems, Lieselotte (2003) "Measure Noun constructions: An instance of semantically-driven grammaticalization" *International Journal of Corpus Linguistics* 8(2) : 283-312.
- Dirven, Rene and Radden, Günter (2007) *Cognitive English Grammar*. Mouton de Gruyter.
- 早瀬尚子 (2002) 『英語構文のカテゴリー形成—認知言語学の視点から』勁草書房。
- 早瀬尚子・堀田優子 (2005) 『認知文法の新展開—カテゴリー化と用法基盤モデル』研究社。
- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』講談社。
- 河上暫作 (編著) (1996) 『認知言語学の基礎』研究社出版。
- Lehrer, Adrienne (1986) "English Classifier Constructions" *Lingua* 68: 109-148.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things*, The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald, W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1. Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- Langacker, Ronald, W. (1990) *Concept, Image and Symbol*. Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald, W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.2. Descriptive Application*. Stanford University Press.
- Lipton, James (1991) *An Exaltation of Larks*. New York: Penguin Books.
- 松本曜 (1991) 「日本語類別詞の意味的構造と体系：原型意味論による分析」『言語研究』99号, 82-106. 日本言語学会。

早瀬尚子

- Matsumoto, Yo (1993) "Japanese Numeral Classifiers: A Study on Semantic Categories and Lexical Organization." *Linguistics* 31: 667-713.
- Talmy, Leonard (2000) Toward a Cognitive Semantics, Vol. 1 and Vol.2. The MIT Press.
- 山口清美 (2004a) 「英語類別詞の認知性について」 *JELS* (The English Linguistic Society of Japan) 21:189-198.
- 山口清美 (2004b) 「英語類別詞と話者の事態解釈」『大阪外国語大学言語社会学会研究報告集』 6:71-83.
- 山口清美 (2005) 『英語類別詞と認知』 大阪外国語大学博士論文シリーズNo.39. 大阪外国语大学言語社会学会.
- Wierzbicka, Anna (1988) *The Semantics of Grammar*. Mouton de Gruyter.